様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　９ 月 ２１ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：新学術領域研究（研究領域提案型）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｈ０６３４２

研究課題名（和文）顔と身体表現の多文化比較フィールド実験研究

研究課題名（英文）Multicultural Experimental Study on Facial and Bodily Expressions

研究代表者
高橋　康介（Kohske, Takahashi）

立命館大学・総合心理学部・教授

研究者番号：８０６０６６８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　53,060,000円

研究成果の概要（和文）：本研究プロジェクトでは、フィールド実験によりアジア、アフリカなど多様な地域における顔認知実験を実施することで、顔認知の普遍性と多様性について明らかにすることが目的であった。6年に渡る研究の結果、表情認識にとどまらず、顔認知の枠組みそのものに、これまで考えられていなかったような地域的多様性があることがわかった。すなわち、目目口という顔の図式化（∵）は人類普遍的ではない、ということである。また人類学者・フィールドワーカーと実験心理学者の越境的異分野連携の構築の上で実施したフィールド実験を通して、実験室実験だけでは見落とされていた顔研究における実験の文脈負荷性が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「顔とは何か」これは学術的にも社会的にも大きな問いかけである。誰もが、他者の顔を同じやり方で認識しているのだろうか。この問いに対して、フィールド実験などの量的、質的研究を通して、我々は明確に「NO」という答えを示した。他者の顔の認識の仕方、さらに言えば「顔とは何か」という概念でさえ、文化的、地域的背景の産物である。情報化社会の中で、生身の人間同士のコミュニケーションのウェイトが相対的に下がっている。このような時代背景の中で「顔」の役割を再考する必要がある。顔認知の多様性を所与のものとして、「顔とは何か」という問いに社会的、学術的に応えていく必要がある。

研究成果の概要（英文）：In this research project, we aimed at revealing the universality and diversity of face recognition by conducting face recognition experiments in diverse regions such as Asia and Africa through field experiments. The results have suggested that there was regional diversity in the individuals' style of face recognition, not just in recognition of facial expression. More specifically, the schematic representation of a face as eyes and mouth (∵) cannot be considered as human universal. Furthermore, the field experiments conducted on the basis of interdisciplinary collaboration between anthropologists, field workers, and experimental psychologists, emphasized the contextual-loadness in the experiments of face studies, which had been overlooked in laboratory experiments.

研究分野：認知心理学

キーワード：顔認知　フィールドワーク　人類学　実験心理学　フィールド実験

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

グローバル規模の人的交流が急速に進む現在、文化を越えたコミュニケーションの様態を理解し、円滑なコミュニケーションをサポートするためには、感情の認識と表出の媒介となる顔と身体表現の文化差を知ることが不可欠である。このためには東洋対西洋という枠組みを越えて、さまざまな文化や地域から心理学実験により定量データを取得し、文化的背景の理解に基づいた人類学的視点から解釈するという、心理学・人類学の学際融合の上に成り立つ多文化比較フィールド実験研究を進める必要がある。

背景として、文化心理学は東洋(東アジア)対西洋(北米・西欧)という対比により、その理論を高度に発達させてきた(Nisbett 2001 など)。これは東洋と西洋において心理学実験が容易で定量データが取得しやすいこと、及び東洋・西洋の人々の価値観、生活スタイルなどの文化的背景を深く理解できていたことが理由として挙げられる。しかしグローバル規模で文化を見渡したとき、東洋と西洋の文化環境には共通点も多く、文化の多様性のごく限られた範囲のみを取り扱っているという限界もある。また現代では交通手段と情報環境の発展により、対面、オンライン問わず、東洋西洋圏を越えてグローバル規模の人的交流が急速に増えている。したがって、文化の多様性をグローバル規模で理解して、そして現代のトランスカルチャー状況に貢献するために、東洋西洋圏を越えた多文化比較研究が必要である。

表情の認識と表出については 20 世紀後半から多文化比較研究が行われており(Ekman 1969)、文化間で似ているが微妙に異なる「表情の方言」という考え方が提案されている(Elfenbein 2007)が、理論は未熟である。東洋対西洋の比較研究が築き上げてきたような洗練された理論を導くには、(1)さまざまな文化や地域から再現可能な実験により定量データを取得して、(2)文化的背景の理解に基づき人類学的視点から解釈する、という作業が不可欠である。我々研究グループではこれまで、人類学と認知心理学の融合のもと、文字や情報技術が普及していない地域や電力供給がない地域を含むフィールドで持ち運び可能なタブレット実験環境を構築して、アフリカ諸地域（タンザニア・カメルーン等）を含めた文化比較研究を実施してきた。このようなアプローチが「多文化をつなぐ顔と身体表現」を標榜する新しい顔身体学の構築に必須であった。

２．研究の目的

本計画班では、実験研究を専門とする心理学者とフィールドワークを専門とする人類学者で研究グループを構成する。研究グループでは既にフィールドの中に持ち運び可能な実験システムを構築し、主にアフリカの諸地域で認知心理学実験を実施して定量的データを収集していた。本計画ではこれを発展させて、(1)顔や身体表現からどのように感情を認識するのか、表情とジェスチャの感情評定と同時視線計測により明らかにし、(2)顔や身体表現によりどのように感情を表出するのか、タブレット実験とイラスト描画から明らかにすることを目指した。以上のフィールド実験及び発展的研究を土台に、定量的検証と人類学的解釈を積み重ねて、コミュニケーションの中での顔と身体表現の役割・機能・利用形態の通文化性と文化依存性について解明することを目的とした。

研究 1「認識の研究」では、さまざまな文化、地域の人々が顔や身体表現からどのような感情をどのように認識するのか検討した。具体的には表情、ジェスチャ、絵文字などの刺激に対して認識される感情の種類と強さ、感情認識時の行動学的ダイナミクスなどを定量化して文化依存性と通文化性を明らかにすることを目的とした。

研究 2「表出の研究」では、さまざまな文化、地域の人々が顔や身体表現から感情をどのように表出するのか検討した。これまでの人類学的研究から、イラスト描画は認識している世界観を創造的かつ端的に表す可能性が示されていた。例えば図 2 上のゴリラ人間はカメルーンのバカピグミーが描いたイラストであり、隣接地域のバクウェレに対する認識を反映している。そこでイラスト描画課題として、基本表情を自由に描く課題、及び中立 Emoticon を指定の表情に変形させる課題により、自由な感情表出状況のおいて重要な部位や表現を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

本研究計画はフィールド実験研究を土台としながら、研究の進捗に伴いさまざまな手法を取り込みながらフィールド研究を実施した。フィールドにて持ち運び可能なタブレット装置による実験環境を構築して、東アジア・東南アジア、東西アフリカ、南米、西欧、北米などのフィールドにアクセスし、顔と身体表現に関する定量データを収集した。各文化、地域の信念やライフスタイルなどの背景について調査した上で、定量データの文化差や地域差に対して人類学的解釈を重ねて、感情の認識・表出を担う顔と身体表現の文化差と、それを生み出す文化の力の有様を探った。

研究グループは、既に学際研究を進めている高橋（認知心理学）、島田（霊長類学、東アフリカ）、大石（人類学、西アフリカ・南米）、錢（知覚心理学、東アジア・東南アジア・欧米）の 4 名をベースとして、適宜フィールドワーカーの参加を募りながら、多地域へのアクセスを確保し

た。
　フィールド実験研究として(1)さまざまな地域、文化の表情、ジェスチャ、絵文字を刺激として感情評価実験を行い、さまざまなフィールドの被験者が、それらの刺激からどのような感情をどのように認識するのか検討した。(2)さまざまなフィールドで、イラスト描画手法により自由な感情表出状況における表出データを収集した。以上の感情の認識と表出について、さまざまなフィールドのデータを定量的に比較して、顔と身体表現の通文化性と文化依存性を明らかにした上で、文化依存的な点に関して人類学的視点からの解釈を重ねて、文化差を生み出す要因を探った。

４．研究成果
　最初に年度ごとの研究成果の概要を述べた後で、本計画研究において得られた研究成果をまとめる。
（2017 年度）
　顔身体学フィールド実験として、アフリカ(タンザニア)・カメルーン・フィンランド・タイ等世界各国にて実験・調査を実施した。また日本国内にて多地域の表情刺激について判断を行う表情弁別実験を実施した。3 月にはバリ島ワークショップにてフィールド実験チュートリアルを行い、文化人類学チームと研究手法の共有を図った。同じく 3 月には心理学チームに同行してスイス・フランスの共同研究者を訪問し、国際連携でのフィールド実験共同研究についての議論を行った。
　またフィールド実験という研究の方法論を含む、本研究チームの活動内容については多くの場で招待講演等を行った(日本視覚学会 2018 年冬季大会・大会企画シンポジウム「多文化をつなぐ顔と身体表現」、第 1 回犬山認知行動研究会議、関西学院大学 KG-RCSP 合同ゼミ、専修大学社会知性開発研究センター/心理科学研究センター「心理学における再現可能性入門」)。以上のように、研究初年度であったが、フィールド実験によるデータ取得と予備調査、国内外での研究チームの活動報告、様々な活動を通して文化人類学・哲学との連携体制を構築することが出来た。
（2018 年度）
　研究 1 の感情認識と研究 2 の感情表出について、表情判断のタブレット実験、表情表出の描画実験により順調に進展している。フィールド実験として、タンザニア・カメルーン・タイ・フィンランドで単純顔の表情描画実験を実施し、タンザニア・カメルーン・中国雲南・ケニアで表情判断実験および人物模写描画実験を実施した。日本国内にて、これらの実験結果との比較のためのコントロール実験を実施した。
　人類学と実験心理学の越境的学際融合に関して、計画班人類心理会議を複数回開催し、フィールド実験の進め方や得られたデータの解釈、人類学と実験心理学の越境的学際融合の進め方についてなど密に議論を行った。ここに計画班 A01-P01 床呂氏や公募班 A01-K102 田氏なども参加し、領域全体に渡る人類学=実験心理学の研究連携のハブとしての役割を担った。越境的学際融合のため 2018 年度文化人類学会分科会「文化人類学と異分野のコラボレーション―達成したこと・問題点・今後の課題」にてフィールド実験研究の取り組みや課題、学際融合の実情を紹介し議論を進めた。A01-P01 床呂氏がコメンテーターとして参加した。また計画班 C01-P01 と合同で第 3 回顔身体カフェ「顔を描く・顔を描かれる・顔を知る」を開催した。顔を「描く」ことによる内面の表出についての調査を行い、実験計画(自画像描画)の立案に至った。我々が当たり前のように顔として認識し、顔として扱っているものが、他の地域や文化の人たちにとってはそう見えていないのかもしれないという可能性を複数の研究結果が示された。トランスカルチャー状況における「顔」とは何かについてもう一度考え直すこと、そして安易な先入観や思い込みを排除して丁寧に調査することが、我々には必要であろうという結論に至った。
（2019 年度）
　これまで、(1)絵文字表情認知、(2)図式的顔イラスト表情描画、(3)図式的顔イラスト表情認知、(4)顔身体模写のイラスト描画、(5)顔の図式的表現の認識の多様性をカメルーン、タンザニア、ケニア、中国、タイ、フィンランドなどのフィールドで実施しており、この過程で、例えば顔認識の図式そのものの多様性といった興味深い発見がなされてきたが、2019 年のフィールド実験では、タンザニア、カメルーン、ケニア、タイ、日本における実験を実施し、あらたに顔認識そのものの多様性が確認された。研究開始当初は予想していなかったものであり、従来の心理学における顔認識の常識に対して疑問を投げかけるものであることから、今後の研究の大きな指針となった。
　このような発見に至ったのは、本計画班が当初から目指した人類学と実験心理学の循環と越境的融合の一つの形であると言える。アウトリーチ活動として、東京外国語大学アフリカンウィークスとコラボレーションの上、絵画展「アフリカで描かれた顔と身体たち」を開催した。これまでフィールド研究で収集してきた描画データを集めたものであり、好評を博した。同イベントにてフィールドネットセミナー「学際的なフィールドワークから描画を考える」として、フィールド研究のなかでも描画行為、描画作品に焦点を当て、今後の研究の発展性について議論した。

（2020 年度～2021 年度）
2020 年度及び繰越年度の 2021 年度は新型コロナウィルス感染症の影響で海外のフィールドへの渡航が実現しなかった。この期間、研究チーム内でオンラインおよびオンサイトでの会合を重

ね、フィールド実験に関して人類学者と心理学者の間でフィールド実験という研究手法に関する議論を進めた。本研究の開始当初は、実験室実験を持ち運び可能なものとし、フィールドに持ち込み実験を実施して仮説を検証し、その結果を得て人類学的な解釈をもとに新たな仮説を構築するという循環を想定していた。ところが 2017 年度から 2019 年度まで再三に渡りフィールド実験を実施する中で、実際のフィールド実験はこのようなシンプルな循環では進まないことや、実験室実験でさえ多大な文脈負荷性が存在することなどが明らかとなってきた。この点を実験心理学、人類学の両面から捉え直し、フィールド実験のあり方に関する議論を進めた。この他、民族誌を利用した身体表現の研究や仮面資料を利用した実験研究、顔身体観の多様性や個人差に関する調査実験など、フィールド実験とは異なる手法ではあるが顔身体の多様性に関する研究を進めた。アウトリーチとして「顔身体の進化と文化」企画、フォーラム顔学 2021 にて顔身体学の学際連携セッション『象徴としての顔身体を考える』開催、講演など、幅広く活動を行った。

（2022 年度）

2022 年度も通常のフィールドワークが可能な状況ではなかったが、現地在住者の研究協力により、ケニア国内でフィールドワークを依頼し実施することができた。これまでの研究から示唆されてきた知見について実験及びインタビューにより検証した結果、研究開始時には予想もしていなかった顔認知の多様性が質的研究、量的研究の双方から明快に示された。

また 2022 年春にはケニア・ナイロビでの国際会議 10th Federation of Africa University Sports (FASU) Games Pre-Games International Symposium の開催に協力し、本研究班から 5 件の発表を行った。2022 年末には、哲学班の河野哲也氏とともにケニア・ナイロビでのフィールドワークを行い、ナイロビ内のスラム訪問、ナイロビ近郊のマサイビレッジの訪問などを通して心理学的、哲学的視点から顔身体の多様性に関する議論を行うという、本研究領域の集大成とも言うべき活動を実施した。この際、ナイロビ市内の 2 大学を訪問し、2022 年度末には今後の研究の継続と拡大に向けたコラボレーションに着手している。

研究成果（１）顔認識の枠組みの多様性

欧米を中心に発展してきた認知心理学において、顔の図式化といえば目目口（∵）という考え方が常識であり、本研究プロジェクトも当初はこの前提から出発して感情認識や感情表出の多様性の検討を進めた。ところがフィールド実験研究を進める中で、この常識が極めて限られた文化的背景の中でしか通用しないものであるという可能性が示された。絵文字表情認識課題では絵文字の表情が地域によっては期待通りに伝わらないことがわかった。図式的な顔パーツ同定課題では、日本および欧米圏では明らかに口と認識されるパーツに対して、口以外のパーツとしての認識が多数を占める地域があることもわかった。以上の結果は、顔の図式的表現の文化的多様性を浮き彫りにするものであり、顔認知の枠組みそのものの再考の必要性が明確となった。

研究成果（２）顔の認識における主要な領域

アフリカ各地で実施した顔の描画実験において、欧米圏ではほとんど描かれることのない眉から鼻へかけての隆起が頻出すること、口を書く際に歯まで描かれることが多いことなど、顕著な文化・地域依存性が見られた。顔描画において描かれる領域は、日常的な顔認識の中で手がかりとして利用されることの多い、いわば顔認識の主要な領域であると思われる。本研究プロジェクトの中で、このような基本的な顔認識過程の中にすら大きな文化差が潜んでいることが明らかとなった。今後の心理学における顔研究全般に大きな影響を及ぼす結果であると考えられる。

研究成果（３）顔とは何かという問題

例えば地域によっては「顔」に該当する明確な単語が存在しない、「顔の描画」を求めると身体まで同時に描かれるなど、顔とは何かという概念において、文化的多様性の存在が示唆された。欧米社会は身体部位の中でも顔を極端なまで重要なものとして位置づけている。言い換えれば身体と顔を別物としてみなし、顔そのものを個人を代表する概念・物質として位置づけている。ところがこのような顔の偏重は人類に普遍的なものではなく、西洋近代社会の文化背景、教育や社会制度を産物であるかもしれない。以上の知見から、「顔とは何か」という問いについて再考する必要性が明確となった。

研究成果（４）実験の文脈負荷性と越境的異分野連携の構築

人類学者・フィールドワーカーと実験心理学者のコラボレーションとして成立した本研究プロジェクトでは、当初はパッケージ化された実験をフィールドで実施することでアクセス困難な文化、地域の定量的データを収集することが目的だった。しかし実験を実施する中で、実験という研究手法そのものがもつ文脈負荷性を目の当たりにすることとなった。たとえば匿名の顔写真を提示して課題を実施してもらう際に「これは誰なのだ？」という問いが実験の場で発せられるなどの事例である。翻って日本や欧米の実験室実験でも、気づかないような暗黙の了解（たとえば「これは実験なので目の前の顔を誰なのか問う必要はない」など）が文脈にあり、その上で実験研究が成立しているということも明らかとなった。このような実験研究の文脈負荷性は、異分野研究者からなる越境的連携の構築ができたからこそ得られた視点であると言えよう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　8件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　10件）

１．著者名 Ujiie Yuta、Takahashi Kohske	４．巻 184
２．論文標題 Associations between self-reported social touch avoidance, hypersensitivity, and autistic traits: Results from questionnaire research among typically developing adults	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Personality and Individual Differences	６．最初と最後の頁 111186～111186
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.paid.2021.111186	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Ujiie Yuta、Takahashi Kohske	４．巻 75
２．論文標題 Own-race faces promote integrated audiovisual speech information	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Quarterly Journal of Experimental Psychology	６．最初と最後の頁 924～935
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/17470218211044480	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Ujiie Yuta、Takahashi Kohske	４．巻 34
２．論文標題 Weaker McGurk Effect for Rubin’s Vase-Type Speech in People With High Autistic Traits	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Multisensory Research	６．最初と最後の頁 663～679
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1163/22134808-bja10047	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Hasegawa Ryuju、Tada Kanae、Yonemitsu Fumiya、Ikeda Ayumi、Yamada Yuki、Takahashi Kohske、Kondo Hirohito M.	４．巻 92
２．論文標題 Pre-registration for empirical research and its practices:	５．発行年 2021年
３．雑誌名 The Japanese journal of psychology	６．最初と最後の頁 188～196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4992/jjpsy.92.20217	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Ujiie Yuta、Takahashi Kohske	4．巻 7
2．論文標題 Psychometric properties of the Family Allocentrism Scale among Japanese adults	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Heliyon	6．最初と最後の頁 e05871～e05871
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.heliyon.2020.e05871	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 高橋康介	4．巻 62
2．論文標題 新しくて古い心理学のかたち	5．発行年 2019年
3．雑誌名 心理学評論	6．最初と最後の頁 304-310
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.31234/osf.io/5pzy7	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 高橋 康介	4．巻 26
2．論文標題 野島久雄賞受賞によせて	5．発行年 2019年
3．雑誌名 認知科学	6．最初と最後の頁 404～406
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11225/jcss.26.404	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Qian Kun、Yamada Yuki	4．巻 7
2．論文標題 Exploring the Role of the Behavioral Immune System in Acceptability of Entomophagy Using Semantic Associations and Food-Related Attitudes	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Frontiers in Nutrition	6．最初と最後の頁 1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fnut.2020.00066	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Zhu Siqi、Sasaki Kyoshiro、Jiang Yue、Qian Kun、Yamada Yuki	4．巻 8
2．論文標題 Trypophobia as an urbanized emotion: comparative research in ethnic minority regions of China	5．発行年 2020年
3．雑誌名 PeerJ	6．最初と最後の頁 e8837～e8837
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.7717/peerj.8837	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 島田将喜	4．巻 34
2．論文標題 タンザニアde遊び！その4	5．発行年 2019年
3．雑誌名 マハレ珍聞	6．最初と最後の頁 5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Takahashi Kohske、Oishi Takanori、Shimada Masaki	4．巻 48
2．論文標題 Is ? Smiling? Cross-Cultural Study on Recognition of Emoticon’s Emotion	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Journal of Cross-Cultural Psychology	6．最初と最後の頁 1578～1586
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/0022022117734372	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計32件（うち招待講演　10件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 高橋康介
2．発表標題 顔認知の多様性
3．学会等名 認知科学研究センター主催第35回研究会（招待講演）
4．発表年 2021年

１．発表者名 高橋康介,氏家悠太
２．発表標題 仮面の顔らしさと魅力に関する心理学的検討
３．学会等名 フォーラム顔学2021
４．発表年 2021年

１．発表者名 高橋康介
２．発表標題 図式化される顔身体とその多様性
３．学会等名 フォーラム顔学2021 新学術領域『顔身体学』特別企画『象徴としての顔身体を考える』
４．発表年 2021年

１．発表者名 高橋康介
２．発表標題 顔認知のフィールド実験からわかること、その難しさと面白さ
３．学会等名 関西若手実験心理学研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yuta Ujiie, Kohske Takahashi
２．発表標題 Familiar faces induce a stronger McGurk effect than unfamiliar faces
３．学会等名 ECVP2021
４．発表年 2021年

１．発表者名 高橋康介
２．発表標題 フィールド実験による視覚認知研究
３．学会等名 システム視覚科学研究センターセミナー（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kohske Takahashi
２．発表標題 Facing to diversity of seeing faces
３．学会等名 CiNet Friday Lunch Seminar（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 鈴木萌々香・高橋康介
２．発表標題 日本人とアメリカ人が謝罪を表す顔文字から受ける印象の比較.
３．学会等名 第11回多感覚研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 氏家悠太・高橋康介
２．発表標題 視聴覚統合における他人種効果‐ 日本人大学生を対象とした検討‐.
３．学会等名 第11回多感覚研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 高橋康介
２．発表標題 顔身体学における描画フィールド実験
３．学会等名 フィールドネットセミナー「学際的なフィールドワークから描画を考える」
４．発表年 2019年

１．発表者名 高橋康介・島田将喜・大石高典・錢コン・田暁潔
２．発表標題 ワークショップ「顔を描く・顔を描かれる・顔を知る」
３．学会等名 東京外国語大学アフリカンウィークス
４．発表年 2019年

１．発表者名 高橋康介・島田将喜・大石高典・錢コン・田暁潔
２．発表標題 身体の中の顔―フィールド実験から見えてきた顔身体認識・表現の多様性
３．学会等名 第4回公開シンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築」
４．発表年 2019年

１．発表者名 氏家悠太・高橋康介
２．発表標題 視聴覚統合における他人種効果の検討.
３．学会等名 日本基礎心理学会第38回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 高橋康介・佐藤妃奈乃・三宅詠輔・村上佳菜子・森田博文
２．発表標題 顔ガクガク錯視とは何なのか―ブレ画像との比較実験―
３．学会等名 日本基礎心理学会第38回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 飯塚宜子、園田浩司、田中文菜、大石高典
２．発表標題 人類学の知を子どもと共有するために――狩猟採集民バカ・ピグミーに学ぶワークショップを通して
３．学会等名 日本環境教育学会・第30回年次大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 島田将喜
２．発表標題 動物の遊び行動と進化
３．学会等名 公開シンポジウム「子ども期の起源を探る　―霊長類学の視点から―」（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 島田将喜
２．発表標題 タンザニアにおける描画フィールド実験
３．学会等名 フィールドネットラウンジ企画セミナー「学際的なフィールドワークから「描画」を考える」
４．発表年 2019年

１．発表者名 錢コン
２．発表標題 東南アジアにおける描画実験
３．学会等名 フィールドネットラウンジ企画セミナー「学際的なフィールドワークから「描画」を考える」
４．発表年 2019年

１．発表者名 大石高典
２．発表標題 カメルーンにおける描画実験
３．学会等名 フィールドネットラウンジ企画セミナー「学際的なフィールドワークから「描画」を考える」
４．発表年 2019年

１．発表者名 高橋康介
２．発表標題 フィールドで実験をするという行為について
３．学会等名 第2回 犬山認知行動研究会議
４．発表年 2018年

１．発表者名 高橋康介
２．発表標題 :)は笑っていますか？絵文字の表情認知に関する文化比較研究
３．学会等名 基礎心理学会第37回大会 若手オーラルセッション
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yarimizu, H. & Takahashi, K
２．発表標題 Perception of average appearance of multiple faces.
３．学会等名 The 14th Asia-Pacific Conference on Vision（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 大石高典
２．発表標題 カメルーンにおける顔認知の野外実験研究――フィールドでの経験からみた可能性と成果共有の課題について．
３．学会等名 日本文化人類学会第52回研究大会分科会「文化人類学と異分野のコラボレーション―達成したこと・問題点・今後の課題」
４．発表年 2018年

１．発表者名 高橋康介
２．発表標題 続・フィールドにおける認知実験-文化人類学と認知心理学の融合による仮説生成と仮説検証の循環
３．学会等名 日本文化人類学会第52回研究大会分科会「文化人類学と異分野のコラボレーション―達成したこと・問題点・今後の課題」
４．発表年 2018年

１．発表者名 高橋康介・島田将喜・大石高典・錢昆
２．発表標題 続・顔と身体表現の多文化比較フィールド実験研究
３．学会等名 公開シンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築（第2回)」
４．発表年 2017年

１．発表者名 鑓水秀和・高橋康介
２．発表標題 複数の顔の平均顔としての表象を形成できるか
３．学会等名 日本基礎心理学会第36回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 高橋康介
２．発表標題 顔認識の多様性を知る
３．学会等名 第1回 犬山認知行動研究会議（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 高橋康介
２．発表標題 顔認知における感性情報処理
３．学会等名 第17回 感性学研究会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 高橋康介
２．発表標題 再現可能性ベストプラクティス
３．学会等名 専修大学社会知性開発研究センター／心理科学研究センター「心理学における再現可能性入門」（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 島田将喜・高橋康介・大石高典・錢昆
２．発表標題 フィールドワーカーから見た心理学実験と実験心理学者から見たフィールドワーク
３．学会等名 KG-RCSP合同ゼミ（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 高橋康介
２．発表標題 顔・パレイドリア・文化
３．学会等名 KG-RCSP合同ゼミ（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 島田将喜・高橋康介・大石高典・錢昆
２．発表標題 異文化で異分野と出会う～多文化比較フィールド実験研究を実現するということ
３．学会等名 日本視覚学会2018年冬季大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

１．著者名 松本尚之、佐川徹、石田慎一郎、大石高典、橋本栄莉	４．発行年 2019年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 288
３．書名 アフリカで学ぶ文化人類学	

１．著者名 ボニー・ヒューレット、服部志帆、大石高典、戸田美佳子	４．発行年 2020年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 420
３．書名 アフリカの森の女たち	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	島田　将喜 (Shimada Masaki) (10447922)	帝京科学大学・生命環境学部・准教授 (33501)	
研究分担者	大石　高典 (Oishi Takanori) (30528724)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授 (12603)	
研究分担者	錢　昆 (Qian Kun) (60736354)	九州大学・アジア・オセアニア研究教育機構・准教授 (17102)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	氏家　悠太 (Ujiie Yuta)		
研究協力者	彭　宇潔 (PENG YUJIE)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	稲角　暢 (Inazumi Nobu)		
研究協力者	田　暁潔 (Tian Xiaojie)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関